

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 402

敗戦の暗部を直視して、戦後の歩みを一新せよ！

哲学者の鶴見俊輔が評論家の芹沢俊介との対談『脱・マニュアルズムが「考える力」を育む』（『論座』02・7）で、戦前の日本を支配してきたマニュアルズムが戦後の日本を支配しつつけたという視点に立って、こう語っている。

「1853年の黒船来航のときから、1905年の日露戦争終戦までの間、日本にはマニュアルがなかった。いきなり黒船なんてものが来てどうしたらいいのか、徳川諸侯から何からみんな上を下への大騒ぎだったでしょう。このときどうやって人びとはそれと立ち向かったのか。そのときの公<sup>フォーミュラ</sup>式は、『自分の見た状況から問題を切り取って答えを出す』。先生なんていないから、自分で失敗しながら解決策を探って身につけてきたんです。この時期、日本は世界史に残るような驚くべき達成をしたと思うんですよ。アメリカ人から見てもヨーロッパ人から見てもそれは驚くべきことだった。

例えば、児玉源太郎（1852～1906年。日露戦争時の満州軍総参謀長。台湾総督、文部大臣など歴任）みたいな人物がどうして出てきたのか。19世紀の世界史を見渡してみても、ああいう軍人はほとんど例を見ない。ナポレオンはロシアに負けるけど、彼はナポレオンと同じことをやって負けなかった。彼は西洋の近代的用兵術をドイツのメッケル少佐の話、それも通訳を聞いただけで会得した。文部大臣もやったし、台湾総督もやって、彼の代でサトウキビ栽培を黒字にした。陸軍大学を何とか出ただけで留学もしていない彼が、どうしてこれだけの状況感覚を持っていたのか。

このほかにも、陸奥宗光、小村寿太郎、山本権兵衛、高橋是清、犬養毅、大山巖といった、のちに知恵ある指導者となるのは、みんな状況から自分で問題を切り取ってきた人たちです。状況そのものは別に問題じゃないんだけど、状況から自分で問題をつくる。これは思索の生まれてくる源なんですよ。

彼らは、明治国家を『つくった人』であって、明治国家に『つくられた人』じゃないんです。そこから私が思いつくのは『つくる自然』と『つくられた自然』、『つくる国家』と『つくられた国家』の関係です。日露戦争終戦でつくられた国家は先進国の仲間入りをし、最後はアメリカと覇権を争うという、とんでもないところまでいくんです。」

日露戦争勝利の1905年の「このとき国家の型もできたし、国民というものもできた。官僚になるためのマニュアルもできた。一高（現在の東大）の首席で高等文官試験を通るといのは総理大臣候補でしょう。（中略）

しかもこのマニュアルズムは、1945年にも終止符を打たれなかった。マッカーサーはこ

れにヒビを入れただけで、東大・文部省・天皇というアメリカにない三つのものを使って、非常に巧みに占領をやったと思う。このマニュアルイズムが、なかなかつぶれないんです。」

鶴見俊輔は学校教育のマニュアルイズムについても「マニュアルというのはどんどん状況から離れていくから、形式的整合性さえあればいい。秀才とはマニュアルによって人より早く答えを出す能力のことだから、それを小学校一年のときからやっている人は、人より早く先生の心の中にある、ただ一つの正しい答えを読む能力が発達しているわけです。そんなのが官僚になって外交やりたいなんて言ったって、できるわけがないでしょう」と言及しているが、日本国憲法が大日本帝国憲法の「改正」として位置付けられることによって、日本国憲法の中に象徴天皇制として明記され、「連続」が保たれたという問題も、この「マニュアルイズム」という観点から捉え返すことができるように思われる。敗戦に見舞われた日本の支配勢力にとっても、大半の日本人にとっても、天皇制が廃絶されることは「マニュアルイズム」に終止符が打たれることに等しかったのではなかったか。おそらく敗戦に直面してこれからどうすればいいのか、途方に暮れている日本人にとって、天皇制の存続は実効的であるよりも、精神面での「マニュアルイズム」の効果を発揮したと推測される。

本当のことをいえば、1945年の日本の敗戦は1863年の黒船来航にも匹敵する事態であったにちがいない。「いきなり黒船なんてものが来てどうしたらいいのか、徳川諸侯から何からみんな上を下への大騒ぎだった」ように、敗戦は濃厚だったとはいえ、敗戦後の日本や自分たち日本人の行く末を全く考えていなかったし、考えられなかったことからすれば、黒船来航時と同じ、「自分の見た状況から問題を切り取って答えを出す」やり方をもって敗戦後の社会を生き抜く以外になかった。だが、「東大・文部省・天皇」という戦前の日本社会をリードしてきた「マニュアルイズム」の「連続」が保たれただけでなく、一見民主的、平和的な日本国憲法が勝手に出来上がっているという新しい「マニュアルイズム」の要素が加わることによって、もはやなにものにも寄り掛からずに何度も失敗しながら、自分たちの頭で考えて解決策を探っていくという、未踏の事態に直面したときの原初的な態度、方法で戦後の日本をつくり上げていくということにはならなかった。

更に、黒船来航時と異なるのは、敗戦のもつ意味を深く考えるなかからしか戦後の日本は迫り上がってこないという、深刻な問題も課されていたことである。しかしながら、戦前の日本を支配してきた「マニュアルイズム」が戦後の日本を覆うことによって、日本の社会も日本人もそれなりに苦労しながらも、事もなく戦後として訪れる自然の時間のなかを潜り抜けていったのだ。「マニュアルイズム」に身を委ねるということは、自分の頭で問題を組み立て直して歩を進めることを放棄して、思考停止状態に陥ることであるが、戦時中は国家のために死ぬ国民を育成するという目標に立って、自分の頭でモノを考えない日本人を大量に産出していたので、「マニュアルイズム」はなんの支障もなくはびこり、敗戦という一大事態に見舞われたからといって、自分の頭を持たなくなった日

本人に、これから先のことは自分で考えよ、と放りだしたところでどうすることもできないことは目にみえており、マニュアルを与えないわけにはいなくなっているという深刻な事情もあったにちがいない。

評論家の保阪正康は『週刊現代』(03・3・29)で、戦前の日本人が《盲目的な行動》へと駆り立てられていった仕組みについて語っている。《満州事変以降、日本では国民に犠牲を強いる支配のシステムが1年ごとに着々とできあがっていき、それは、《まず1番目はこれ以外の考えは持ってはならない》と教える教育の国家統制。2番目は情報の多様化を認めない検閲。3番目が、反逆的な言動をとると軍人に脅される、という暴力装置。4番目が法律で国民に抑圧を強いる立法機関の偏狭化》の4つの柱に大別される。《こうした仕組みでがんじがらめに縛り上げられれば、誰でも体制に従わざるを得ないでしょう。それでも反逆の意志を見せる者は、村八分など“模範的国民”の自発的行為によって生活権を奪う。かつての軍部は、計算しながら徐々に、こうした状況を作っていたのです。おそらく今の北朝鮮は、同じような状況だと思えます。》

戦前の日本人がいかに思考停止状態をしいられていたかは、日本兵捕虜の振る舞いをみれば歴然とする筈だ。なぜなら、戦陣訓を叩き込まれて、捕虜になった際の対応を教えられていなかった日本兵が捕虜という事態に直面したとき、初めて自分の判断をしいられることになるからだ。『日本兵捕虜は何をしゃべったか』(山本武利著、文春新書)の鹿島茂による書評(02・1・27付毎日)は、このことを明らかにしてくれる。

《以前、雑誌で衝撃的な写真を見たことがある。太平洋戦争の末期なのだろう、飛行中の米軍機に同乗した日本人捕虜が搭乗口から下方をのぞきながら、米兵に日本軍の陣地の様子を教えているのである。この写真を見たとき、生きて虜囚の辱めを受けることなかれという戦陣訓などにつながる考えと、この捕虜の精神状態は、いったいどのような関係にあるのかまことに不思議な気がしたが、アメリカ国立公文書館の日本人捕虜に関する資料を徹底解読した本書により、その疑問が一気に解けた。日本人捕虜の驚くほど協力的な態度、それはまさに戦陣訓的なものが直接的に生みだした産物だったのである》と冒頭から切り出し、本文に入っていく。

《ガダルカナル島以降急増した日本人捕虜を尋問した米軍将校の手になる尋問テクニック教本によると、捕縛後すぐに情報の信頼を勝ち得ることが必要だという。日本人の捕虜は三段階で態度が変化するからである。

「捕虜となった第一段階では拷問、処刑されると確信しているため、かれらの口から出る情報はでたらめである。ところが、一日か二日たつと、第二段階となる。かれらは拷問されるところか、待遇や食事が良いことに驚き、感謝の気持ちをいだくようになる。アメリカ側の厚意に報いるべく、ペラペラしゃべり出す。しかもその情報は信頼できる。尋問の効果が最大となるこのときを逃がしてはならない。というのは10日から二週間もたつと、かれらは十分な食事と親切な扱いに慣れだし、尋問を面倒くさがったり、無

関心となるからである」

日本兵は虜囚の辱めよりも死を選べと命令されたが、捕虜となった後の態度についてはまったく教えられていなかった。それがために結果的に捕虜になったときに、完全に戸惑ってしまう。拷問はなく食事も待遇もきわめてよい。ここで感謝と信頼の気持ちが湧く。しかし、捕虜となった以上、そのことが祖国に知られたら家族に害は及ぶから、帰国は諦め、いわば準アメリカ人となって生きるしかないと思う。ならば、「これからの祖国」であるアメリカに積極的に協力しようではないか。ただ、天皇に対する尊敬だけは強く残っている。これが、戦陣訓をたたき込まれた兵士の平均的な態度であったというのだ。

さて、この反応、どこかで見たものではないか？ そう、敗戦後に日本人が示した反応そっくりではないか。それもそのはず、アメリカは、戦時中の捕虜の反応から分析して、戦後の対日政策をすでに決定していたというのだ。

「アメリカ軍は捕虜の供述や捕獲文書を通じ、占領後の日本ならびに日本人への対応のノウハウを学んでいる。したがってマッカーサーは占領後、天皇の戦争責任を追及しようとしなかったし、ワシントンもその方針であった。アメリカにとって、日本占領は日本人全体を捕虜にしたに等しかった」

このほか、本書の功績は、国内では情報管理にあれば神経質であった日本軍が、戦場でのそれにまったく無関心であったため、戦死した将兵の持ち物（地図、命令書、手紙、遺書）がアメリカ軍に回収されてただちに解読されていた事実を明らかにしたことにある。軍部は敵に日本語は読めないと高をくくっていたのだが、アメリカ軍は開戦後直ちに日本人二世による解読班を組織し、これに捕虜を加えて、完璧な諜報組織を作り上げていたのである。》

「マニュアルイズム」の弊害が、ここに端的に浮き彫りにされている。いうまでもないが、「マニュアルイズム」の弊害はマニュアル化されている領域でのみ、そのマニュアルが通用されるにすぎず、マニュアル化されえない膨大な領域のなかではマニュアルは全く役に立たないことである。しかし、「マニュアルイズム」の本当の弊害は、マニュアル化できない突発的な事態の到来に際して、対応できないということにあるだけではない。「マニュアルイズム」に誰もが身を委ねることになったとき、その「マニュアルイズム」は自体が通用する範囲内に人々を閉じ込めて、人々をマニュアル化して、「自分の見た状況から問題を切り取って答えを出す」という人間の能力を奪い取ってしまうところにある筈だ。当然予想される事態にも目をつぶって遣り過ごそうとする態度が、そこに生まれる。

戦争になれば味方の兵が捕虜になることは当然予測されるのに、軍隊の「マニュアルイズム」は日本兵の捕虜について全く考えなかった。なぜか。認めたくなかったからである。認めたくないから、捕虜になった場合のマニュアルは作成しなかったのだ。なぜ、認めたくなかったのか。「マニュアルイズム」に浸食された精神は、ありとあらゆる問題のなかに出かけるのではなく、問題から逃れるようにして閉じ込めり、問題を限定して

いくことが習性になってしまっているからである。いいかえると、「マニュアルズム」は多岐にわたる問題のマニュアル化には馴染まず、常に問題を平均値した上での平板さをマニュアル化することを心掛けているからだ。だから、嫌なことは考えたくないし、考えたくないから日本兵捕虜の対応について目をつぶってしまったのである。

日本兵捕虜の対応について目をつぶったようにして、日本は戦争に敗れた際の対応についても目をつぶっていた。勝つことしか考えていなかったからだ。戦争になれば捕虜にもなるし、敗れるかもしれないことは当然なのに、捕虜について考えなかったように、敗戦についても考えなかったのである。捕虜について考えなかった結果、どういう事態が惹き起こされたかは、この書評にその一端が示されている。《思っている以上に敵は日本のことを知っている。知らないのは、どんな場合も自分が特殊だと信じている日本人だけなのである。これは今も変わらない》と書評は締め括られているが、確かに《これは今も変わらない》から、「マニュアルズム」に閉じ込められている日本は、9・11以降の目にみえてきた国際情勢の激変に対応できず、敗戦が明白になったときの日本のように、相変わらずの右往左往ぶりをさらけだしている。

1941年12月8日に日本軍がハワイの真珠湾を攻撃したことによって、日米開戦が勃発したが、その翌年の42年にはアメリカによって対日占領政策の検討が着手されており、45年占領開始時までにはかなり準備が進んでいた。《アメリカは、戦時中の捕虜の反応から分析して、戦後の対日政策をすでに決定していたというのだ》という書評の記述をそこに挿入すると、おそらく準備されていた戦後の対日政策は、《戦時中の捕虜の反応》を分析することによってより一層具体性を帯び、完成されていったのかもしれない。ただここで当初は意外に思い、すぐ後でなるほど感じたのは、捕虜になって《「これからの祖国」であるアメリカに積極的に協力しよう》という気持が湧き起こってきたながらも、《天皇に対する尊敬だけは強く残っている》という指摘である。つまり、日本という国はどうなるうともかまわないが、《天皇に対する尊敬だけは強く残っている》ということだ。ここから、日本国と天皇とが切り離されている意識を、戦前、戦中の日本人が持ちつづけていたことが窺われる。

日本という国家の上位に天皇制が聳え立っていることを感じ取ったが故に、「マッカーサーは占領後、天皇の戦争責任を追及しようとしなかったし、ワシントンもその方針であった」という記述は、保阪正康が先の『週刊現代』の文章のなかで、《占領下で日本にはなぜ反GHQ地下運動はなかったか?》という疑問に、《マッカーサーは天皇に戦争責任を問うことはせず、民主主義を伝えた父親のような人物として日本国民に印象づけることに成功した》からだ、と答えていることと合致している。この《戦時中の捕虜の反応》からすると、日本国憲法が大日本帝国憲法の「改正」として位置付けられて、「国体護持」の「連続」が保たれたという問題は、単に日本の支配勢力の強い意向であっただけでなく、日本人全体の願望であったという事実もよりくっきりとみえてくる。

日本兵が捕虜となった後の対応は全く考えられていなかったという問題は、日本が敗れた後の対応は全く考えられていなかったという問題の縮小版にほかならなかったが、裏返せば、後者は前者の拡大版にほかならなかった。「アメリカにとって、日本占領は日本人全体を捕虜にしたに等しかった」ということだ。捕虜になったすべての日本人は、敵のアメリカ軍からどのような残酷な仕打ちを受けるかもしれないと戦々恐々としていたし、女は全員凌辱されるかもしれないと覚悟していた。ところが、《拷問はなく食事も待遇もきわめてよい。ここで感謝と信頼の気持ちが湧く。》日本人全体が捕虜になっているのだから、日本兵捕虜が《捕虜となった以上、そのことが祖国に知られたら家族に害は及ぶから、帰国は諦め》といったような負い目を抱くこともなく、戦前の日本の指導者たちよりも、自分たちのことをよく考えてくれる《アメリカに積極的に協力しようではないか》という気分が募ってくるのは、自然であった。

ここで看過してならないのは、天皇の戦争責任を追及しないことと、日本人全体の戦争責任を追及しないこととはセットになっていたことである。アメリカ軍は日本兵捕虜に対して、《拷問はなく食事も待遇もきわめてよ》くすることですべてを免責して、アメリカにいかに協力するように仕向けるかに腐心したのと同様に、敗戦直後の日本人に対しても、アメリカの占領統治政策に積極的に協力してもらえるように仕向けていった。そのためにGHQが日本人に訴えていったのは、「軍国主義者に支配されたあわれな国民」であり、あなたがたは被害者であるという図式であり、天皇もまた、軍国主義者に利用されていった被害者という図式が作りだされて、天皇も日本国民も戦争責任が免除されていく空気が醸成されていった。

悪いのは戦争を惹き起こした一部の軍国主義者であって、日本国民も天皇も利用され支配された被害者という図式は、今回のイラク攻撃で「悪い大統領に騙されている国民は、解放されるべき、罪のない国民」というアメリカの規定の中で甦っているが、相変わらずの図式をアメリカは通用させようとしているとみるよりも、日本の占領時にその図式があまりにも見事に成功したから、イラクの占領時にもその手を持ち出そうとしているとみるべきだろう。アメリカのそのような図式があらわになる以前に、マッカーサーの厚木到着前の45年8月28日、敗戦処理に当たった当時の東久邇稔彦首相が内閣記者団との会見で、「ことここに至ったのは、もちろん政府の政策もよくなかったからでもあったが、また国民の道義のすたれたのも原因である。この際、軍官民、国民全体が徹底的に反省し、懺悔しなければならない」と述べたことを、報道陣が「敗戦の責任は国民ひとしく負わねばならぬ」とする「一億総懺悔<sup>さんげ</sup>」として伝えるという一幕もあった。

この「一億総懺悔」については、『戦後史大事典』（三省堂）で次のような説明がなされている。《戦争を終結に導く段階で、もっともおそれられたのは軍隊の反乱であった。これを未然に防ぐために天皇の聖断を必要とし、天皇の権威の一部を代行しうる皇族首相が生まれたのだが、政府の第一目標は「国体の護持」であり、これと表裏一体の「一

億総懺悔」が政府側から強調されたため、戦争責任の国民への転嫁だという批判をまねいた。だが総力戦体制のなかでほとんどの国民が戦争に協力した事実をどう解釈するかは、まだ決着のつかぬ問題である。》(雑喉潤)

東久邇内閣は一ヶ月半ほどで退陣することになったが、それから二カ月弱の12月9日から、『真相はかうだ』というラジオのキャンペーン番組が始まった。保阪正康は『文藝春秋』の特別企画『父が子に教える 昭和史25の「なぜ?」』のなかの『「A級戦犯」東條英機は悪人だったのか?』の解答者として、この番組についてこう説明している。この《番組のなかで、日本を侵略的軍事行動に走らせたのは関東軍であり、それが日本陸軍そのものの体質であるとして、東條内閣こそそれを如実にあらわしていると執拗に説き続けた。「国民思想統制の機構は、合併、中央集権、及び経済的圧迫からなっていました。結論として、東條が戦時中、常に思想統制政策の蔭にいたことを、我々は唯一人として忘れることができないのです」

このようなプロパガンダが毎回流された。軽率なことに、東條役の声優のもとには脅迫状が殺到し、たびたびキャストを変えるほどだったという。

東條を犯罪者として見ることで、国民は騙された存在として免罪されるし、戦後の苦しい生活からくる怒りや不満のはけ口にもなった。連合国はそのような戦略をもって、東京裁判や言論活動を利用しつつ、国民が東條を憎むように仕向けた。》

03・8・22付の産経抄は、半世紀ちょっと前の日本統治では米国は成功したのに、イラクではなぜ成功していないのかと問いながら、敗戦直後の日本人の変化に言及している。《敗戦の日を境に、なぜか日本人は180度の方向転換をみせ、ナショナリズムをなげうち、アイデンティティーをなくしてしまった。いうならば“骨抜き”にされたが、それにはGHQ(連合国軍総司令部)の巧妙な日本人洗脳工作があったという ▼折から評論家・保阪正康氏が、GHQの対日情報戦略をつぶさに検証した著書『日本解体』(小社刊)を世に問うている。それによると米国の戦略は「日本国民の発想自体を解体せよ」というもので、ラジオと新聞という二つのメディアを駆使した ▼ラジオでいえば昭和20年12月9日(開戦日の翌日である)から、『真相はかうだ』(のちに『真相箱』)を登場させた。番組はベートーベンの「運命」をもって始まり、「日本人よ、あんたらは被害者なのだ」という懐柔キャンペーンだった ▼新聞でいえばラジオと同じ時期に大手各紙に『太平洋戦争史』という軍国日本否定の連載を開始させた。焼け跡の人びとは戦争に負けたという心理的虚脱のただなかにある。その心の空白をつく巧みな宣伝工作であり、報道統制であり、言論弾圧だった ▼つまり日本人の思考の方式と頭脳を“占領”してしまったのである。その結果、だれもがすすんで過去の日本を全否定するようになった。ナイーブな日本人と、したたかなイラク人。民族性や国民気質を短絡的に図式化してはいけませんが、戦後イラクの問題にそんなこともふと考えてみる。》

保阪氏の記述は、《東條が極悪非道の犯罪者であるかのようなイメージは、東京裁判

の流れを見ても意図的に作り出されたものであるが、東京裁判にとどまらず、連合国、とくにアメリカが中心になり、日本国民を「誤まて思想と人物によって利用された存在」と見立てて、言論活動を制限しながら、国民が東條を憎むように世論誘導もおこなった》という観点に立って、原爆実験を行ったことに対する罪責感もおそらく手伝って、アメリカが東條らの指導者に戦争責任のすべてをなすりつけて、日本人全体の戦争責任を免除する流れをかたちづくり、大半の日本人がその流れに乗ったと記されているだけで、産経抄のように、《敗戦の日を境に、なぜか日本人は180度の方向転換をみせ》たとか、《“骨抜き”にされた》とか、米国の戦略は《日本人の思考の方式と頭脳を“占領”してしまった》といているわけではないことに留意する必要があるだろう。

確かに敗戦の日を境に、日本人は米国の戦略に乗せられて鬼畜米英から親米に変わっていったが、それは《180度の方向転換》であり、“骨抜き”だったのだろうか。日本の権力者たちよりもアメリカの権力者たちのほうが、自分たちにとって都合のよい面が多かったから、単に日本人はどちらが損か得かを考えて、アメリカの権力者になびいていただけのことではなかったか。《ナイーブな日本人》どころか、生き延びることにかけてはしたたかな日本人だったのが透けてみえてこないだろうか。GHQが、《日本人の思考の方式と頭脳を“占領”してしまった》とみるなら、戦前は軍国日本の指導者が、《日本人の思考の方式と頭脳を“占領”してしまっ》ていたとみなされる。そうであるなら、日本人の頭脳の“占領”者が軍国日本からGHQに変わったただけであって、その転変が問題であるのではなく、《日本人の思考の方式と頭脳》の“占領”者が一度も日本人自身ではなかったところに、問題は集中しているのではないか。

産経抄は、GHQによって日本人の頭脳が“占領”された《その結果、だれもがすすんで過去の日本を否定するようになった》と悲嘆に暮れているようにみえるが、戦時中の日本人を「国家のために死ぬる」要員としてしか取り扱ってこなかった軍国日本が、親米感情を通じて戦後の日本人によってしっぺい返しを食らっているともみられるのではないか。更に、ラジオと新聞のメディア戦略を駆使した、GHQの「日本国民の発想自体を解体せよ」というあり方 - この情報戦略は見事なまでに現在をも貫いているが - は、ラジオの『真相はかうだ』であれ、新聞の『太平洋戦争史』の連載であれ、あまりにも露骨すぎて当時の多くの日本人に不快感を与えたと思われるが、アメリカからすれば、戦争は軍事行動から情報戦のかたちをとって打ち続けているという認識があっただろうから、軍事行動の終結をもって戦争は終わったと日本の支配者層を含む日本人全体が思い込んでしまったとき、彼らは物理的な武装解除のみならず、精神の武装解除にも見舞われたにちがいがなかった。

当然のことながら、GHQの対日情報戦略は原爆投下や都会の集中爆撃など、自分たちの都合の悪いところは棚上げしていたが、それでも内地の日本人が知らなかった、朝鮮半島や中国での日本兵の数多くの残虐な事実を暴露していたことは間違いない。この

問題は日本人にとって、自分たちが戦場に送り出した夫や息子である日本兵が、数多くの目を背けたいような残虐な仕打ちを行っていたこと、そしてその事実が敵方のGHQによって暴露されたという二つの点で、大変な衝撃であったと想像される。しかしながら、そのことはGHQの対日情報戦略としてではないところでの、日本人自身の手による戦地での日本兵の行為の検証、直視という不可欠な態度を要請していた筈である。アメリカが自分たちにとって都合のよくない戦争の側面をどこまで正確に米国民に伝えているか疑問であるからこそ、日本人は軍国日本の「悪」を暴露しつづけるアメリカにむかって、自分たちはこれほどの悪を犯したが、あなたがたも日本に対して筆舌に尽くしがたい理不尽な行為の数々を行ってきたではないか、と問い迫る必要性があった。

もちろん、精神の武装解除をされた日本人に、自分たちの手で自分たちの兵隊が行ってきた行為を裁くことができる筈もなかったし、したがって、一方的に軍国日本の「悪」を暴露しつづけるアメリカにむかって問い迫ることもありえなかった。それは日本人が敗戦に直面して、焼け跡のなかで心理的虚脱感に陥っていたからだけではない。つまり、産経抄のいうように、《その心の空白をつく巧みな宣伝工作であり、報道統制であり、言論弾圧だった》として、それに参ってしまったわけではない。戦前からずっと日本人は、そんな風になるようにして過ごしてきたにちがいない。参ってしまったというなら、日本人は戦前から軍国日本をかたちづけてきた「マニュアルズム」に抗しきれないままに流されつづけてきたのだ。

ところで産経抄は、「日本国民の発想自体を解体せよ」というGHQの対日情報戦略が日本人を「骨抜き」にしたとか、《日本人の思考の方式と頭脳を「占領」してしまった》とか嘆くばかりで、その「骨抜き」や頭脳の「占領」が一体どこを目指していたか、という点には目も呉れないようにみえる。GHQは《「日本人よ、あんたらは被害者なのだ」という懐柔キャンペーン》を張ることによって、軍国日本の支配者たちと一般兵士や銃後の守り手であった膨大な日本人とを切り離そうとしたのだ。それは保阪正康がいうように、戦争の勝者たるアメリカに、原爆を投下し、集中爆撃を繰り返して、自分たちの家を焼き払い、家族を殺したアメリカに、憎悪と敵意が向かってこないように、自国民が国家の指導者を憎むように仕掛けるといふ、GHQの対日情報戦略にほかならなかった。占領統治政策を円滑に遂行するために、GHQは日本人を手なづけ、調教する必要があったということだ。

産経抄は日本人の見事な調教のされ方に、「骨抜き」を覗き込んだが、軍国日本の指導者のみならず、その指導者に従った日本人全員も同罪であるとして、アメリカを中心とする連合国によって日本人全体の戦争責任が追及されることになるよりも、戦争に駆り出された自分たちも被害者であったとして同情され、免罪されるほうが大半の日本人にとって都合がよいのは、火を見るよりも明らかであった。当然のことではないか。GHQの占領意図と日本人の打算とが結託して、戦前の日本が中途半端に否定され、いい

加減に改造されていくことになったのだ。かくて東條英機ら「A級戦犯」に戦争責任の一切が押しつけられて、「被害者」たる日本人は戦後の国造りにかかわることもないまま、表紙の替わった新生日本国の平和的で民主的な国民として、問題を頬被りしたまま自然の時間に身を委ねていったのである。

保阪正康は先の文章で、東條の評伝を書くにあたって、《昭和40年代終わりから50年代半ばにかけて、東條夫人、秘書官、側近の幕僚、その他関係者200人余に話を聞いた》その結果、《とくべつな見識や理念はなく、ひたすら日本陸軍の組織原理に忠実で、小心翼翼とした生真面目な軍官僚 というイメージ》に行き着いたと記している。《中将だった関東軍参謀長時代、部下である石原莞爾中佐から「東條二等兵」とののしられたという類の、東條の“小役人”ぶりをあらわすエピソードは無数にある。たとえば、ありとあらゆることをメモ帳にちびた鉛筆で書き留める“メモ魔”だった。そのメモ帳も日別、テーマ別に分かれていて、それを日曜日には改めて一冊に整理するというのである。》

首相時代でも、《物資不足がいわれだすと、みずからひそかに近くの庶民の家を回って、ゴミ箱をのぞいて、「まだ食料は大丈夫だ」と言ったとか、干してあるオシメに触って、「(化繊より高価な)木綿だ」と喜んだとか、スケールが小さいことはなはだしい》という感想が洩れてくるほどであり、《陸軍省や参謀本部の将校さえ、「あの時代に東條さんに日本を託さなければならなかったのは、東條さんにとっても、日本にとっても不幸だったと今になって思いますね」と認めていた》と記すが、《にもかかわらず、戦時下、東條は“救国の英雄”の如く扱われ、「元寇の折には北条時宗、今この国難には東條英機」と誉めそやされた。それが戦後、一転して極悪人まがいの犯罪者として謗られる》ことになったのだ。《そこには何があったのか》と問うて、《むろん東條を誇ることで国民が敗戦の鬱憤を晴らそうとしていたことは間違いがないが、主たる要因は、極東国際軍事裁判(東京裁判)のA級戦犯になり、絞首刑にされるその経緯のなかにあると断言》する。

もともと《東條を中心とした軍事指導者、官僚、天皇側近などを想定し》た「極東国際軍事裁判所」条例の第5条「(イ)平和に対する罪(ロ)通例の戦争犯罪(ハ)人道に対する罪」に基づいて、昭和21年5月3日から始まった東京裁判には28人のA級戦犯が起訴された。《戦勝国として敗戦国をさばくという色彩を薄めるため、昭和に入ってから陸軍の指導者を中心に戦争計画を進めるための共同謀議がおこなわれた、という考え方を連合国は採用し、それは東京裁判の法廷で検事側の起訴状にそのまま盛り込まれたのである。つまり日本は、陸軍指導者を軸に侵略のための共同謀議を練り、それが満州事変(昭和6年)以後の日本の軍事行動になったというのだ。》

これはある意味できわめて非現実的なストーリーで、日本にはそのような共同謀議を練る機関も意思もなく、むしろ対症療法の策しか弄せなかったというのが現実の姿であった。東條はこうした謀議の中心にいたというのが検察側の主張であったが、東條にすれば、いわれのない理由を次々に示されたと受け止めても仕方がない。》

保阪氏によれば、首相の器には程遠く、《小心翼翼とした生真面目な軍官僚》のイメージが似合っていた東條が、41年10月に陸軍大臣兼任で首相となり、12月8日に真珠湾攻撃を行って対米戦争に突入し、44年7月にサイパン陥落によって総辞職するまでの主要な戦争期間を最高指導者として務めたために、連合国側によって無理矢理《侵略のための共同謀議》の中心人物とみなされるに至ったということだ。当然、戦争遂行の最高責任者としての戦争責任を免れえなかったとしても、《日本にはそのような共同謀議を練る機関も意思もなく、むしろ対症療法の策しか弄せなかったというのが現実の姿であった》なら、検事側の起訴状というものは《きわめて非現実的なストーリー》に貫かれており、それ故に《ストイックなまでに検事団長のキナンと応酬を続けてい》た《東京裁判における東條の態度は、「裁くなら勝手に裁け」といわんばかりの被告や、「国策はそうであったかもしれないが、私自身はそれに反対だった」などと巧みに責任を回避しようとする被告に比べて、一本筋の通ったものだった。》

東條がどこからみても「悪人」どころか、《小心翼翼とした生真面目な軍官僚》のイメージであって、ヒトラーなどと比較するべくもない小人物であったという事実は、当時の日本が東條のような人物を最高指導者に据えるにふさわしい国であったことを照らしだしているし、また当時の日本人もその程度の国民として東條の貌に映しだされていたということを物語っている。だからこそより一層、凡庸な国民は凡庸な《東條が極悪非道の犯罪者であるかのようなイメージ》を、東京裁判やGHQの対日情報戦略によって意図的に作り出されていく流れに乗ったといえなくはない。GHQによっていくらか《国民が東條を憎むように仕向け》られたとしても、東條を憎みなくなる衝動が国民の内に起こらなければ、そうはならない。おそらく日本人は東條の貌に自分たちの凡庸さを覗き込んだのであり、自分たちを憎む代わりに東條の凡庸さを憎んだのではなかったか。

東條に対する多くの《根拠のないデマが、新聞などの主要メディアを使って国民の怒りを増幅するように伝えられた》が、《すべては虚構であった》とあって、保阪氏はこう問い返す。《東條を含めて、A級戦犯が犯罪者なのか否かは、実は私たち日本国民が主体的に判断すべき問題である。連合国の占領政策の一環としての東京裁判や世論誘導では、東條は「犯罪者」とされてきたが、それは戦勝国の報復という構図を隠蔽するためのものでしかない。この構図に依拠している限り、私たちはあの戦争の検証を独自の視点ではおこなう能力はもちえない。》つまり、こういうことだ。「私たちはあの戦争の検証を独自の視点ではおこなう能力はもちえない」ま、戦後の60年近くを過ごしてきたが故に、今回のイラクへの自衛隊派遣をめぐっても、我々は《独自の視点ではおこなう能力はもちえない》のである。過去を頼りてきた者に現在を直視することができないのは、あまりにも当然のことなのだ。現在が過去の累積として我々に押し寄せている以上、現在を掌握することは過去を掌握することにほかならないのである。

2004年1月17日記